

京都大学言語学懇話会
1989年度活動報告

第19回例会

1989年4月15日(土) 午後1:30~4:30

楽友会館1階パーラー

研究発表

「英語小節の取り扱いについて」

橋本喜代太(D1)

「土族語互助方言における円唇・中母音 *o, *ɔ の発展について

— 特に、東溝方言を中心とした観察 — 」

塩谷茂樹(D2)

第20回例会

1989年7月22日(土) 午後1:30~4:30

京大会館102号室

研究発表

「カンナダ語の複合語について

— 特にドラヴィダ語複合語の記述枠組みとの関連で — 」

家本太郎(研修員)

海外調査報告

「インド東北部のチベット・ビルマ系言語」

藪司郎(大阪外国語大学)

第5回大会(第21回例会)

1989年12月9日(土) 午前11:00~午後5:00

京大会館102号室

開会の辞

西田龍雄 教授

研究発表

「チャガタイ・トルコ語における『非カルルク』要素について」

菅原 睦(D1)

「中世低地ドイツ語の音韻論、書記法について」

河崎 靖(大阪市立大学)

「現代日本語の『XがYを~させる』構文について」定延利之(D1)

「日本語の逆接の接続詞について — 『しかし』、『ところが』を中心に — 」*

北野浩章(D1)

「『お~下さい』という表現について」

前田広幸(大阪女子大学)

「Processing Empty Subjects in Japanese」

坂本勉(松蔭女子学院大学)

* 本誌掲載の同一著者論文を参照ください。

塩谷茂樹

土族語は、中国・青海省東部の互助土族自治県及び民和県を中心に居住する土族によって話される蒙古系言語である。蒙古祖語は、a, e, i, i, o, ö, u, ü の8母音体系であるのに対し、土族語は、a, e, i, o, u の5母音体系であり、一見した所、前者から後者へ、円唇母音の数が4から2へ減少し、歴史的に、前舌円唇母音の後舌母音化が起こったかのように見える。しかし、実際には、蒙古祖語の第1音節の *o, *ö から土族語への母音の対応関係は、1対1ではなく（図1）、通時的に、次の4つの変化、(1)無条件変化、(2)高母音化、(3)長母音化、(4)脱円唇化を認めることができる。本発表の目的は、土族語互助方言における円唇・中母音 *o, *ö の発展、即ち、(2)～(4)の3つの変化を、その「条件付け」及び相対的な「順序付け」の2点から、究明することにある。分析の結果、明らかになった事柄は、次のようである。

1. 高母音化 (*o→u, *ö→ü) A. 直後に流音 l, r を伴う場合。特に *o, *ö が語頭に立つ場合、この傾向は著しい。B. 語頭子音が[-voice]（第2音節頭の硬音との同化によって2次的に生じた語頭子音の硬音も含む）で、しかも、第1音節が開音節の場合（ただし、第2音節頭子音が鼻音の場合を除く）。

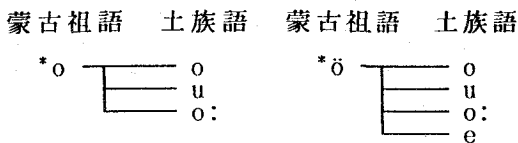
2. 長母音化 (*o→o:, *ö→ö:) ここでは、「オルドス方言の形より、蒙古文語の第1音節がo(ö)、第2音節がu(ü)であると考えられるものと、土族語の第1音節の長母音o:との間に相関関係のある可能性がある」という仮説を示した。

3. 脱円唇化 (*ö→e) これは、ある特定の語彙にのみ見られる変化で、その条件は厳密には不明である。しかし、土族語に見られるこの変化は、甘粛・青海省の他の蒙古系言語、保安語・東郷語にも共通して見られることから、これら3言語が分裂する以前の段階に起こった可能性があることを指摘した。

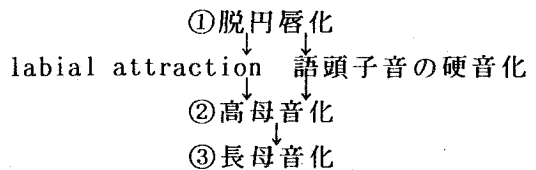
以上、1～3の3つの変化を、土族語に見られるlabial attraction 及び語頭子音の硬音化の2つの特徴をもとに相対的に順序付けした結果が、（図2）である。

最後に、筆者は、前舌円唇母音の後舌母音化が起こったのは、少なくとも、①脱円唇化の後であろうと推論する。

（図1）



（図2）



（しおたにしげき、博士後期課程）

カンナダ語の複合語について

ー特にドラヴィダ語複合語の記述枠組みとの関連でー

家本太郎

本発表においては、ドラヴィダ語学に於て従来行われて来たような、名詞複合語と動詞複合語を相互に独立した範疇とする仕方とはらず、当該言語の文法体系において、形容詞複合語をも含めて、連続体的特性をもつものとして捉えた。そうすることによって、古層カンナダ語ひいてはドラヴィダ語の複合語記述に対し、新しい枠組みを提出できると考えるからである。

複合語認定基準としては、結合時における連声現象、単音節形容詞の語幹複合や結合部位に現れる一種の'morphological glue'の存在が挙げられるが、決定的な基準は、前項が語根形式となることである。形成パターンは N(gen.)-N, N(ins.)-N, N(acc.)-N, N(dat.)-N, N(abl.)-N, N(loc.)-N, N(soc.)-N, N-N(gen.), N-N(dat.), N-N(loc.), N-N(Co.), N(echo)-N, N-N(reit.), N(nom.)-V, N(acc.)-V, N(dat.)-V, N(ins.)-V, N(abl.)-V, N(loc.)-V, N(soc.)-V, N(loc.)-A, A-N, A-A, V(pf.)-N, V(pres.)-N, V(passiv.)-N, V(imp.)-N, V(stativ.)-N, V(adj.)-N, V(able)-N, V-N(loc.), V(v.p.)-V, V(imp.)-V, Adv(←N)-V, Adv(←V)-V, N-Adv, N-N-N, V-N-N, A-N-N, N-neg, N-neg-N である。

ドラヴィダ語語根の品詞性が希薄なことは、過去に僅かに言及されているが、未だ包括的な記述は為されていない。しかし、この現象こそが、複合語記述の際に最も重要となる。特に、当該の動詞・名詞が同形式となることが多く、ドラヴィダ語学で従来その記述が問題となっていた形容詞としても機能する形式も少なからず含まれており、「真の」形容詞の数が限られていることの補完を行っている。多くの当該語彙形式は、前項において、機能的に様々な品詞性（下位範疇としての様々な意味的機能を伴い）を有することができる。

ここで、前項の品詞を統べる、語彙項目より上位のクラス(N-A-V hyper class)を設定することにより記述を簡潔にできる。複合語前項において看られた意味的平行性に加え、このクラス設定の傍証となる動詞・名詞・形容詞の統語的・形態的平行性は、それぞれ、名詞語幹に人称接辞が直接的に付加される pronominalized nounと通常の動詞句・形容詞句との平行性であり、ドラヴィダ語において、属格表示接辞、関係詞形成接辞、形容詞形成接辞が同一の形態（南部ドラヴィダ語派では -a が一般的）をとる傾向があることである。

（いえもと たろう、研修員）

藪司郎

0. 1988年度文部省科学研究費補助金（海外学術研究）による「南アジア諸言語の調査研究とそのデータベースの作成」（研究代表者 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 奈良毅教授）の研究分担者のひとりとして、1989年1月18日から3月12日まで2か月たらず、南インドのマイソール（Mysore）にあるインド諸言語中央研究所（Central Institute of Indian Languages, CIIL）で、インド東北部（従来、包括的にアッサム Assamという名で呼ばれていた地域）の言語状況と二三のチベット=ビルマ系言語の調査研究に携わる機会をえた。調査したミゾ Mizo（ルシャイ Lushai）語、メイテイ Meitei（マニプール Manipur）語、アディ Adi（アボル Abor）語の報告は別の機会にゆずって、ここでは、インド東北部の言語状況について、チベット=ビルマ系言語を中心に、述べてみたい。

1. インド東北部の州別言語状況 ◇アッサム Assam 州〔州都 Dispur〕（Assamese, Bengali,） Bodo, Mizo, Mikir, Miri. ◇メガラヤ Megaraya 州〔Shillong〕（Khasi,） Garo, (Assamese, Jaintia.) ◇ミゾラム Mizoram 州〔Aizawl〕 Mizo, Paw'i, Lakher. ◇トリプラ Tripura 州〔Agartala〕（Bengali,） Tripuri, Meitei. ◇マニプール Manipur 州〔Imphal〕 Meitei, (Nepali, Bengali,） Thado, Kabui, Mao. ◇ナガランド Nagaland 州〔Kohima〕 Konyak, Ao, Angami, Nagamese, Pochury, Phom. ◇アルナチャル・プラデシュ Arunachal Pradesh 州〔Itanagar〕（Nepali, Assamese, Bengali,） Tibetan, Abor, Mishmi, Dafla, Nagamese.

〔CIIL 1973. による。（ ）内は非TB系の言語。Mizoなどは各州の有力言語。

Hindi, English はすべてにおいて共通語として用いられる。]

2. インド東北部のチベット=ビルマ系言語の系譜 ◇クキ=チン（Kuki-Chin）系 Thado, Mizo, … ◇メイテイ（Meitei） ◇ナガ（Naga）系 Angami, … ◇ボド（Bodo）系 Bodo, Garo, Mikir, … ◇カチン（Kachin, Singpho） ◇アボル=ミリ=ダフラ（Abor-Miri-Dafla）系 Abor, Miri, Dafla. ◇ミシュミ（Mishmi） ◇チベット（Tibetan）系 Tibetan, Sikkim Bhotia. ◇ヒマラヤ（Himalayan）系 Lepcha.

〔Link language（「特定言語」）、西田 1957.〕

3. 文献 CIIL 1973. *Distribution of Languages in India.*, CIIL 1985. *House with a Multivision.*, Grierson 1927. *Linguistic Survey of India*, I, i., *Census of India 1961*, I, ii-C(ii) Language Table., Matisoff 1985. "Languages and Dialects of Tibeto-Burman." In McCoy et al. (ed.), *Contributions to Sino-Tibetan*. Leiden. 西田龍雄 1957. 「チベット語・ビルマ語語彙比較における問題」『東方学』15. ほか。 (やぶ しろく、大阪外国語大学)

菅原 睦

15世紀以降の中央アジアにおける主要な文章語のひとつであったチャガタイ・トルコ語は、今日のチュルク諸語のうちではウズベク語や新ウイグル語などのいわゆるカルルク・グループと最も近い関係にある。しかしながらこの言語で書かれた文献、特に韻文中には、カルルク・グループに特徴的な形式（カルルク型形式）とならんでしばしばオグズ・グループ（アゼリー語やオスマン・トルコ語など）やキプチャク・グループ（カザフ語など）の特徴を示すバリエント形式、即ち非カルルク型形式が現れることが知られている。

	カルルク型形式	非カルルク型形式
与格語尾（1，2人称所有接尾辞のあとで）	-gä/-ya	-ä/-a
同（3人称所有接尾辞のあとで）	-gä/-ya	-nä/-na
対格語尾（3人称所有接尾辞のあとで）	-ni/-nī	-n
位格語尾（3人称所有接尾辞のあとで）	-dä/-da	-ndä/-nda
奪格語尾（3人称所有接尾辞のあとで）	-din/-dīn	-ndin/-ndīn
動詞「ある、なる」	bol-	ol-
後置詞「…によって、…とともに」	bilä	ilä

これらのバリエント形式の分布を、いくつかの15～16世紀の文献について調べたところ、次のような結果が得られた。

・与格語尾-gä/-yaと-ä/-a，動詞bol-とol-，後置詞biläとiläに関しては

- 1) 韻文においてはカルルク型形式と非カルルク型形式とがほぼ完全に韻律上の要求に従って使い分けられている
- 2) 散文においてはカルルク型形式のみが用いられている

・与格語尾-gä/-yaと-nä/-na，位格語尾-dä/-daと-ndä/-nda，奪格語尾-din/-dīnと-ndin/-ndīnに関しては

- 1) 韻文において両形式は必ずしも韻律上の要求に従って使い分けられていない
- 2) 散文においても非カルルク型形式（対格語尾-nを含む）の使用が認められる

この分布状況は、さきに非カルルク型形式としてあげたもののうち、-ä/-a，ol-，iläなどが韻律上の効果を目的としてオグズ・グループやキプチャク・グループの言語から取り入れられたものであるのに対して、-nä/-na，-n，-ndä/-nda，-ndin/-ndīnなどは、同様の形式をもつ古代ウイグル語やカラ・ハン朝トルコ語といったより古い時代の言語から受け継がれたものであるという、それぞれの来源の違いを反映していると考えることができる。（すがはら むつみ、博士後期課程）

Notizen zum Forschungsvorhaben Duisburger
Schreibsprache im 16. Jahrhundert

Yasushi Kawasaki

In dem Bericht wurde versucht, historische Schreibsysteme als Forschungs- und Erkenntnisgegenstand zu beschreiben.

In einer Zeit mit streng geregelter und zentral kontrollierter Orthographie ist es von linguistischem Interesse, auf welche Weise historische Schreibsysteme ihre kommunikative Funktion erfüllen konnten, die durch keine offizielle gesellschaftliche Instanz gesteuert oder geregelt wurden, sondern für die ein hoher Grad von Variabilität und Flexibilität charakteristisch war.

Bei den bisherigen Untersuchungen zur historischen deutschen Schreibsprache, überwog ein deutliches genealogisches Interesse in dem Sinne, dass man ausgehend von der neuhochdeutschen Orthographie die frühneuhochdeutschen, mittelhochdeutschen und althochdeutschen Vorgänger zu erforschen versuchte. Das Interesse an den ursprünglich gleichberechtigten aber im 17. Jahrhundert untergegangenen niederdeutschen Schreibsprachen, hat dagegen im Hintergrund gestanden. Dies gilt insbesondere für jenes nieder-rheinische Sprachgebiet, in dem die ehemals freie Reichsstadt Duisburg liegt.

Voraussetzung für die Forschung auf diesem Gebiet ist eine lautetymologische Untersuchungsmethode. D.h. die textintern feststellbaren graphischen Variationen werden in Beziehung gesetzt zum gedachten Kontinuum einer systematischen Lautentwicklung, dessen einer Pol der westgermanische Lautstand und dessen anderer Pol der niederdeutsche Lautstand des heutigen Regionaldialektes darstellt.

(河崎 靖、大阪市立大学)

定延利之

1. 「Yが～なる」（例えば(1a)）で表される事象をXが実現する場合、この表現として「XがYを～する」（(1b)）ではなく「XがYを～させる」（(1c)）という形式を用いることが、少なくとも相当数の話者に観察される。（以下、これらの話者に関する記述である。）

(1) a. 作家が得意になる。

b. 全集の好調な売れ行きが作家を得意にする。

c. 全集の好調な売れ行きが作家を得意にさせる。

2. このような「XがYを～させる」は、発話者がXの動作主性を低いと認知した場合に用いられる。対して「XがYを～する」は、Xの動作主性を高いと認知した場合に用いられる。全集の好調な売れ行きの動作主性が高いと認知すれば(1b)が、低いと認知すれば(1c)が用いられる。

3. 「Xの行為が最終状態を直接実現せず、最終状態実現の蓋然性を高める中継状態を実現するにとどまる」「Xの行為に意志が無い、もしくは欠乏している」等の事由の認知は、Xの動作主性が低いとの認知を導きやすい。例えば妻の浮気が夫にバレて夫が逆上、ヤケ酒をあおるうち癖になり夫がアル中になるという場合は、(2b)より(2c)が用いられやすい。

(2) a. 夫がアル中になる。

b. 妻が（浮気をして）夫をアル中にする。

c. 妻が（浮気をして）夫をアル中にさせる。

4. (3a)の「嬉しい」は、他人が直接実現できない内心的状態を表し、その点で太郎の動作主性は低いとしか認知されず、(3b)は不適格である。

(3) a. 花子が嬉しくなる。

b. *太郎が（プレゼントで）花子を嬉しくする。

c. 太郎が（プレゼントで）花子を嬉しくさせる。

5. 語彙的使役（例えば(4b)）／迂言的使役（(4c)）の使い分け等についても、発話者が認知するガ格名詞句指示物の動作主性の高低がやはり関与する。高ければ語彙的使役、低ければ迂言的使役が用いられる傾向にある。

(4) a. 花子が死ぬ。

b. 太郎が花子を殺す。

c. 太郎が花子を死なせる。

（さだのぶ としゆき、博士後期課程）